

# 新しい 100 年， 史実と記憶の共有に向けて

——関東大震災朝鮮人虐殺 100 年， 韓国における研究史考察 (2013 ~ 2023) と展望

裴 始 美

---

はじめに

- 1 研究の激増とその背景
- 2 歴史研究
- 3 文学研究
- 4 現代文化， 記憶， 歴史否定

おわりに

はじめに

忘れられるとは，何を意味するだろう  
どのように生きていたかが，忘れられることだろうか  
どのように死んでいったかが，忘れられることだろうか  
どのように生き，どのように死んだかが

関東大震災朝鮮人虐殺を詠んだ詩歌，전숙 「상처의 기억 -1923, 간토홀로코스트 [傷の記憶——1923, 関東ホロコースト]」の一部である<sup>(1)</sup>。歴史を研究し，文学や映画，大衆文化を通じて歴史を再現し，記念碑や記念館を建てることは，その歴史を忘れず記憶し，そこから現在の教訓を見つけて未来に引き継がせるためであろう。そして，その歴史を生き抜いた，または死んでいった一人一人が歴史の後景に退かれないよう，留意しなければならない。

関東大震災朝鮮人虐殺に関して韓国社会は，100 年を迎えた 2023 年，最近になってようやく研究・再現・記憶・継承が本格化しつつある。

震災 80 年の 2003 年まで，関東大震災に関する学術論文はごく少数に過ぎず，それも姜徳相など 在日朝鮮人研究者によるものが約半分を占めていた。その原因は，日本の研究を乗り越えるほどの史資料の発掘の困難や，在日朝鮮人に対して「民族主義的な同情は寄せ」ても「現状には無理解」だった研究者の問題意識の限界が挙げられる。2003 年，東京で開かれた 80 周年のシンポジウムで，韓国研究者の 召 광 열 (金廣烈) はこうした限界を踏まえ，植民地朝鮮の歴史に関東大震災朝鮮人虐殺

---

(1) 『오늘의 가사문학 [今日の歌辞文学]』 19, 2018 年。

を位置づける研究が必要であると指摘した<sup>(2)</sup>。

それから10年後，今度は90年を迎えてそれまでの研究成果がまとめられた（노주은 2013）。2000年以降，姜徳相・山田昭次の研究書の翻訳出版<sup>(3)</sup>，東日本大震災による震災への注意と関心の向上などを背景に，朝鮮人虐殺に関する研究が少しずつ増えたが，そのほとんどが文学研究であった。2000年から2013年までの間，歴史研究としては，노주은（盧珠摠）の修士学位論文をはじめとする一連の研究<sup>(4)</sup>，在米研究者의이진희<sup>(5)</sup>や이승희（李升熙）の論文<sup>(6)</sup>が確認できる。文学研究は노주은（2013）で引用された論文だけで13本だったことを想起すると，歴史研究はあまりにも少ない。同じ期間における山田昭次一人の研究成果にも比することができないくらいである。

このときに出された研究課題——韓国近代史，ひいて東アジア近代史における関東大震災朝鮮人虐殺の位置づけや研究分野の不均衡の解消など——は改善されたのだろうか。本稿では，2013年から2023年5月末まで，韓国の学術誌に掲載された論文を中心に，傾向や特徴，課題を検討する。

## 1 研究の激増とその背景

この10年間，関連論文は全部で60本であり，年度別推移や分野は以下の表1，表2（47頁）の通りである<sup>(7)</sup>。各論文の詳細は本稿末の資料〈2013～2023年5月，関東大震災関連学術論文一覧〉を参照されたい。

表1 関東大震災関連研究論文数の推移（2013年～2023年5月）

年	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023 (5月まで)
本数	4	7	9	3	7	6	2	3	7	8	4

(2) 金廣烈「韓国における在日朝鮮人と朝鮮人虐殺事件の研究状況」関東大震災80周年記念行事実行委員会編『世界史としての関東大震災——アジア・国家・民衆』日本経済評論社，2003年，35-41頁。

(3) 姜徳相『関東大震災・虐殺の記憶』（青丘文化社，2003年）は2005年，山田昭次『関東大震災時の朝鮮人虐殺——その国家責任と民衆責任』（創史社，2003年）は2008年に翻訳出版された。

(4) 「관동대지진과 일본의 재일조선인 정책 - 일본정부와 조선총독부의 '진재처리' 과정을 중심으로 [関東大地震と日本の在日朝鮮人政策——日本政府と朝鮮総督府の'震災処理'過程を中心に]」延世大学修士学位論文，2007年，「관동대지진 조선인학살 연구의 성과와 과제 - 관동대지진 85주년에 즈음하여 [関東大地震朝鮮人虐殺研究の成果と課題——関東大地震85周年を迎えて]」『学林』29，2008年など。

(5) 「관동대지진을 주도함 - 일본 제국의 불령선인과 추도의 정치학 [関東大地震を追悼する——日本帝国の不逞鮮人と追悼の政治学]」『아세아연구 [亜細亜研究]』51，2008年。

(6) 「관동대지진과 일본군헌병대 - 재일조선인학살과의 관련성을 중심으로 [関東大地震と日本軍憲兵隊——在日朝鮮人虐殺との関連性を中心に]」『일본학보 [日本学報]』91，2012年。

(7) このほかに文芸評論季刊誌『푸른사상 [ブルン思想]』に，김응교「이민진『파친코』와 드라마 <파친코>의 간토대지진 조선인 학살 [イ・ミンジンの『パチンコ』とドラマ『パチンコ』の関東大震災朝鮮人虐殺]」（41，2022年），김응교「1923년 9월 1일, 비극을 기억하는 작가들 [1923年9月1日, 悲劇を記憶する作家たち]，이만열（李萬烈）「간토 조선인 학살 100주년 [関東朝鮮人虐殺100周年]」（43，2023年）などが掲載されているが，いずれも評論であるため，分析対象からは除いた。

表1をみると、時期による大きな特徴は見当たらない。一年間当たりの論文数はそれほど多くないが、関連研究が途切れることなく続けられてきたといえる。時期の特徴より本数の激増に注目したい。60本とは、20本あまりだった2013年までの論文数に比べると、激増といえるほどの数値である<sup>(8)</sup>。その背景として、2000年代以降、在日朝鮮人問題への関心の高まりを指摘することができる。

従来、日本を対象にする研究は語学や文学が中心で、在日朝鮮人に関する研究は少数に過ぎなかった。90年代半ば以降、日本留学から帰ってきた人文社会学研究者によって在日朝鮮人研究が始まった。2000年代に入ってさらに進められ、2000年には在日朝鮮人問題をメインとする韓日民族問題学会が創立された<sup>(9)</sup>。

一方、欧米のディアスポラ議論が韓国に伝わって在日朝鮮人のアイデンティティに対する関心が高まった<sup>(10)</sup>。友好的な南北関係もあり、北海道朝鮮初中高級学校の日常を描いたドキュメンタリー映画〈ウリハッキョ〉(金明俊監督、2007年)が公開され、同時代を生きる在日朝鮮人の生活や教育にも関心が集まった。2011年には朝鮮学校を支援する市民団体「朝鮮学校と共にする人々モンダンヨンピル」が設立された。2010年代に日本各地で頻発した、嫌韓デモや在日朝鮮人に対するヘイトスピーチも社会的関心と研究を触発させた。

このような関心は研究論文の数にも表れる。韓国の人文社会学系学術誌に掲載された在日朝鮮人関連論文は、1960年から1989年まで48本、90年代に75本、2000年代に282本、2010～2018年には182本だった。2010年代に多少減少したものの、2000年を境にして飛躍的に増えたことが確認できる<sup>(11)</sup>。

同じ頃、朝鮮語で書かれた作品だけに焦点を当てて朝鮮人による日本語文学は排除してきた「閉鎖的民族文学観が解体」され、在日朝鮮人文学研究も徐々に増えた<sup>(12)</sup>。最近(2012～2018年)における日本文学研究の傾向をみると、それ以前に比べてオーソドックスな古典文学研究が減り、歴史、政治、経済、地域研究など隣接分野と関連づけた近現代文学研究が増えた。また、災害や社会問題、韓国文学との比較、在日朝鮮人作家、韓国(人)像を扱った研究が増えたことに特徴がみら

---

(8) 今年は多くの学術会議が予定されているため、年度末から翌2024年まで含めると、関連論文はさらに増えることが予想される。

(9) 後述する関連研究のうち、韓日民族問題学会の学術誌『韓日民族問題研究』に9本の論文が掲載されている。数々の学術誌のなかで一番多い数値である。

(10) ディアスポラ研究は、2010年以降、毎年100本以上の論文が発表されるほど関心が高く研究も続いている(정영미·이경규 「디아스포라의 관점에서 다룬 재일한인분야 연구동향 분석 [ディアスポラの観点から扱った在日韓人分野研究動向分析]」『日本近代学研究』62, 2018年)。

(11) 최민경 「재일한인연구의 동향과 과제: 해역연구의 관점에서 [在日韓人研究の動向と課題——海域研究の観点から]」『인문과학연구논총 [人文科学研究論叢]』40-2, 2017年, 218-219頁。この数値に文学研究は含まれていない。

(12) 김병진 「재일코리안 문학의 연구 동향 고찰 - 세계관으로의 재일코리안 문학 [在日コリアン文学の研究動向考察——世界観としての在日コリアン文学]」『日本文化研究』77, 2019年, 50-51, 54頁。

れる<sup>(13)</sup>。

以上のように在日朝鮮人に対する関心が高まるなか，関東大震災朝鮮人虐殺研究も一緒に増えたのである。上述した背景のほか，東日本大震災，「日本震災時被殺者名簿」の発見（2013年），震災と朝鮮人虐殺を描いた韓国映画<朴烈>（イ・ジュンイク監督，2017年）なども研究の刺激となった。とりわけ，在日朝鮮人をターゲットにしたヘイトスピーチや嫌韓デモ，日本の大型災害のたびにネット上で流布される流言飛語は，震災時の虐殺を連想させた。これらの日本社会の憎悪や嫌悪言説の「近代的原点」として震災時の流言飛語が注目されるようになった（강효숙 2018）。関連研究論文のタイトルに，嫌韓や嫌悪，ヘイトスピーチがたびたび登場するのはこの影響である（김광열 2017, 노윤선, 조경희 2021, 박성호, 김여진 2023）<sup>(14)</sup>。

では，文学研究への偏りが目立った研究分野には変化があっただろうか。

表2 関東大震災関連研究論文の分野（2013年～2023年5月）

分野	歴史			文学		現代文化，記憶，歴史否定
	植民地期	戦後	教科書 <sup>(15)</sup>	日本	朝鮮	
本数	18	9	2	20	6	5

歴史分野が29本と最多ではあるが，文学研究も26本とほぼ同数，文化や記憶・歴史否定に関する研究が5本と続いている。論文数だけみると，歴史と文学研究がバランスよくなされるようになったとみられる。

次節では，「歴史」「文学」「現代文化，記憶，歴史否定」の三つに分け，それぞれの研究の傾向や特徴を検討する。

## 2 歴史研究

2013年までの約10年間，4本ほどしかなかった歴史分野の論文が7倍以上増えている。巻末資料<2013～2023年5月，関東大震災関連学術論文一覧>をみると，数だけでなく，美術史，中国史，戦後日本における真相究明運動，日本の教科書など，素材も多岐にわたっていることがわかる。

(13) 최재철 「한국의 일본문학 연구 동향과 과제 - 일본근현대문학 연구 (2012~2018년) 를 중심으로 [韓国の日本文学研究動向と課題——日本近現代文学研究 (2012～2018年) を中心に]」 『日本研究論叢』 51, 2020年, 275, 278, 283頁。

(14) 2010年代，日本における嫌韓に関する研究が多くなされた。김용기 「혐한과 재일코리아인- 재특회의 논리에 내포된 폭력성을 중심으로 [嫌韓と在日コリアン——在特会の論理に内包された暴力性を中心に]」 (『일본학보』 98, 2014年), 조관자 「일본인의 혐한 의식 - '반일' 의 메아리로 울리는 '혐한」 [日本人の嫌韓意識——'反日'의こだまとして鳴り響く '嫌韓']」 (『아세아연구』 163, 2016年) など多数。

(15) 1995年，日韓の小中高教師たちの交流研究会として設立された日韓合同教育研究会は，毎年教育や歴史，環境，人権，文化などをテーマにしたフィールドワーク，交流会を行っている。岩手県で開かれた2016年の第22回交流会のテーマは関東大震災であった。交流会での授業実践報告や討論は「記憶されない歴史は繰り返される，関東大震災から」をタイトルにした機関誌『한일 교육연구 [韓日教育研究]』 (22, 2016年) に掲載されたが，学術論文ではないため，分析対象からは除いた。

2010年代に入り、韓国の歴史関連公共機関が関東大震災朝鮮人虐殺をテーマにした国際学術会議を開き、研究成果を出すようになったこともその背景の一つとして特記できる。90年を迎えた2013年、東北亜歴史財団主催の国際学術会議の成果が書籍『관동대지진과 조선인 학살 [関東大地震と朝鮮人虐殺]』として刊行された<sup>(16)</sup>。報告者および著者には、代表的な研究者の姜徳相・山田昭次・田中正敬、韓国の研究者の김인덕(金仁徳)・장세운(張世胤)・강효숙(姜孝淑)・서종진(徐鍾珍)、弁護士森川文人と1923日韓在日市民連帯代表の김종수(金鐘洙)などが参加した。同年、独立記念館は立命館大学コリア研究センターと共催で「関東大震災朝鮮人虐殺から90年、国家暴力と植民地主義を超えて」を開催し、その成果が論文として発表された(홍선표・다나카 마사타카 2014)。

以下、四つのテーマに分けて主な論文の内容や特徴をみてみよう。

### (1) さまざまな朝鮮人の対応

まず、関東大震災朝鮮人虐殺に対する朝鮮内外の朝鮮人の対応を取り上げた研究が目立つ。

홍선표(洪善杓)によって、ドイツの朝鮮人留学生在が虐殺の真相を伝えるピラを作成、配布したり、虐殺と植民地支配に抗議する「在独韓人大会(The Great Meeting of Koreans in Germany)」を1923年10月ベルリンで開催したことが明らかになった。このような研究は김강산(2022)によってさらに深められた。김강산(金剛山)は、中国・日本・ドイツ・アメリカ在留の朝鮮人が、朝鮮人虐殺に関して作成した各資料の性格や目的を、日本政府の責任のある行動を求める「抗議書」、独立運動や無産者階級の連帯など、政治・社会的目的を達成するための「宣言書」、虐殺の真相を記録して支援を求めるための「小冊子」などに区分して分析した。朝鮮内の対応に関する研究は、植民地期朝鮮における追悼の歴史を総括した배영미(2021)が挙げられる。1924年には朝鮮の社会運動団体が朝鮮人「犠牲者」追悼会を記念日闘争として行ったが、1925年以降は在朝日本人や植民地行政機構主体の震災犠牲者全体に対する追悼に変わり、30年代半ばからは侵略戦争の勝利を祈る無数の記念日の一つになってしまった。結局、朝鮮人は追悼の主体にも対象にもなり得なかった。

これらの研究はすべて、圧倒的な物理力を動員した帝国日本の統制と弾圧のなかでも、意味のある亀裂を作って朝鮮人虐殺の歴史を記憶しようとした朝鮮人の取り組みに意義を求めている。一方、「国家」の対応を取り上げた研究も登場した。

김광열(2015)は、日本の司法当局と朝鮮総督府、大韓民国臨時政府、中国・北京政府の朝鮮人・中国人虐殺に対する対応や措置を分析した。この論文によって大韓民国臨時政府と中国・北京政府の対応の詳細、朝鮮総督府が朝鮮人死亡者830名を選定して一人200円の弔慰金を交付した事実などが明らかになった。日韓国交正常化準備期から現在まで朝鮮人虐殺の真相把握や解決を試みようともしていない、韓国政府の役割も促されている。

また、震災後、在日朝鮮人労働者や留学生を取り巻く状況と当局の政策の変化を分析した研究(김광열 2016, 조경희 2017, 김진웅)や震災と朝鮮人虐殺が朝鮮と日本の若き画家たちに何を残したのかを考察した研究(기다 에미코)も行われた。

(16) 2016年に日本語版『関東大震災と朝鮮人虐殺』(論創社)が出版された。

## （2） 中国人虐殺

中国人虐殺に注目するようになったことも大きな特徴といえる<sup>(17)</sup>。95年の2018年、独立記念館は韓日民族問題学会と共同で国際学術シンポジウム「解放後、日本関東大地震韓中両国人虐殺に対する真相究明活動とその展望」を開催した。タイトルに中国人虐殺を明記した学術会議は初めてだった。ここで、中国研究者の정리징（鄭樂靜）が「関東大地震後における中国人虐殺事件真相調査研究」を報告した<sup>(18)</sup>。

日本では2003年、日中韓の研究や市民活動を取り上げた国際シンポジウムが開催され、その成果が『世界史としての関東大震災』（日本経済評論社、2004年）として刊行された<sup>(19)</sup>。日本より10年以上遅れているが、鄭樂靜によって中国人虐殺の概略、日中両政府間の外交交渉、民間有志や研究者による資料発掘・被害者遺族支援・真相調査・追悼活動が韓国に伝えられた。こうして始まった中国人虐殺研究との交流は今も続いている<sup>(20)</sup>。中国人虐殺への着目は、関東大震災朝鮮人虐殺に関する研究が、日本人社会主義者や沖縄をはじめとする他地域出身者、障がい者など、虐殺被害者全体を視野に入れた東アジアの歴史研究へと発展する土台を作ったことに意義があろう。

## （3） 植民地主義とジェノサイド

また、震災時の朝鮮人虐殺を突出的、例外的な出来事ではなく、帝国主義の暴力性と植民地主義の民族差別によって必然的に発生せざるを得ない、予見された悲劇とみる研究がなされた。배영미（2020）は、新潟県中津川事件（1922年）・三重県木本事件（1926年）と震災時虐殺を比較分析し、流言飛語や「不逞鮮人」認識、加害集団の性格や当局の態度など共通点を実証し、三つの虐殺事件の関連性を明らかにした。

このような問題意識はジェノサイドへの着目と軌を一にするところがある。震災時朝鮮人虐殺をジェノサイドの観点から分析する研究は在日朝鮮人歴史研究者の姜徳相、鄭榮煥、日本の法学研究者の前田朗によってすでに行われている。강효숙（2018）もこれらの先行研究を踏まえて、東学農民戦争と義兵運動、三・一運動に対する日本の弾圧と虐殺の延長線上に震災時の朝鮮人虐殺を位置づけ、これらをジェノサイドと解釈している。김강산（2023）はもう一步踏み込み、「関東大虐殺」<sup>(21)</sup>が国際的概念のジェノサイドとして成立するかを理論的に分析し、ジェノサイドとみなすことによって得られる学術的、社会的意義を検討した。日本による朝鮮植民地化過程における一連の虐殺を

(17) 管見の限り、韓国で中国人虐殺を取り上げた最初の論文は김광열（2015）である。

(18) そのほか、在日朝鮮人研究者の鄭榮煥による「解放直後の在日朝鮮人運動と「関東大虐殺」問題」、韓国の成周鉉による「1923年関東大地震と朝鮮」、「日本の関東大震災朝鮮人虐殺の国家責任を問う会」の西崎雅夫による「関東大震災の韓中両国人の虐殺に対する日本側の認識と国家責任要求運動」が報告された。

(19) 日本における中国人虐殺研究は朝鮮人虐殺研究より10年ほど遅れて1970年代から始まった。また2014年からは中国人の遺族が東京で開かれた朝鮮人虐殺追悼会に参加している（정리징 2023）。

(20) 2022年9月、独立記念館・国史編纂委員会・東北歴史財団共催の国際学術シンポジウムで、鄭樂靜が「関東大震災下中国人虐殺事件の記憶と追悼活動」を報告した。2023年の論文はこのときの成果である。なお、鄭樂靜は2023年8月にソウルで開催された国際シンポジウムで震災時における中国人の虐殺、収容、送還をテーマに報告した。

(21) 김강산は、事件の核心が地震や災難ではなく「虐殺」にあること、被害者の絶対多数は朝鮮人であっても中国人や日本人も含まれている点などを挙げ、震災と朝鮮人を表記せず「関東大虐殺」を用いている。

ジェノサイドと規定し、「関東大震災朝鮮人虐殺」には収斂できない被害者集団の外縁を広め、暴力や虐殺の性格を世界史におけるジェノサイドに位置づけることができるという。最近、国際法的分析を通じて、震災時朝鮮人虐殺をジェノサイドとみなし、日本の国家責任を問う修士学位論文も発表された（정다운 「관동대진재 조선인 학살에 대한 국제법적 분석-제노사이드와 국가책임 [関東大震災朝鮮人虐殺に対する国際法的分析——ジェノサイドと国家責任]」 ソウル大学, 2021）。

ジェノサイドをめぐるこれらの議論は今後、法学など他分野の研究や国際社会でジェノサイドと規定された他事件との比較研究によってさらに深められるものと考えられる<sup>(22)</sup>。

#### (4) 在日朝鮮人に対するヘイトスピーチ

最後に、在日朝鮮人に対するヘイトスピーチと関連づけた研究に注目しておきたい<sup>(23)</sup>。김광열 (2017) は、日本のヘイトデモにおける「排外主義グループ」の嫌悪言説と、1923年取り調べや裁判における「虐殺犯」の「自己弁明」を分析し、震災当時も現在も、在日朝鮮人は「日本の右派によって日本人共同体にとって‘有害な外部者’」に取り扱われていることを明らかにした。このような研究が登場する背景として、90年代歴史修正主義の台頭以降、「在日特権を許さない市民の会」(在特会)を中心に在日朝鮮人をターゲットにしたネット上の誹謗中傷や街頭でのヘイトデモが行われるようになったことが指摘できる。2009年には在特会のメンバーらが京都朝鮮第一初級学校の門前に集まり、学内に子供たちがいるなか、1時間にかけて「不法占拠」「北朝鮮のスパイ養成機関」など罵声をあげせかけながら暴れる「京都朝鮮初級学校襲撃事件」が起きた。とくに「コリアタウン」のある東京や大阪でのヘイトデモは2010年代半ばにピークに達した。2016年、このような問題に対する対策として、「本邦外出身者に対する不当な差別的言動の解消に向けた取組の推進に関する法律」が制定されたが、罰則規定がないなど十分とはいえ、ヘイトデモは根絶されていない。김광열 (金廣烈) の研究や後述する文学研究は、以上のような現状に対する研究者の問題意識によるものであろう。

なお、韓国初の単行本が刊行されたことも記しておきたい。2020年に성주현 (成周鉉) 『관동대지진과 식민지 조선 [関東大地震と植民地朝鮮]』(선인) が出版された。歴史研究者の著者が青巖大学在日コリアン研究所(2011年設立)在職時からこの問題に関心を持って続けた研究成果を、朝鮮の言論報道、植民地支配政策、義援金募集などの救済活動に焦点を当ててまとめたものである。

以上のような歴史研究は、80年の2003年に提起された「植民地朝鮮の歴史に関東大震災朝鮮人虐殺を位置づける」という研究課題に、歴史学研究者が呼応して取り組んできた成果といえよう。

(22) 2023年8月、独立記念館・国史編纂委員会・東北亞歴史財団・韓国学中央研究院共催の国際学術シンポジウム第2部でジェノサイドと国際法とからめた議論が行われた。

(23) ヘイトスピーチ以外に、在日朝鮮人の歴史に関東大震災朝鮮人虐殺を位置づけようと、解放後在日朝鮮人社会が関東大震災朝鮮人虐殺をどのように記憶、記念してきたかを分析した研究として、김인덕 (2017) がある。

### 3 文学研究

従来、文学研究は関連研究の大部分を占めていた。震災当時、朝鮮人虐殺を記録、表現した日本の文学作品については、日本より韓国のほうが注目され、多くの研究成果が出されてきた。研究対象になった主な作品は、竹久夢二のルポルタージュ「東京災難画信」（1923年）、島崎藤村の小説「子に送る手紙」（1923・1924年）、江口渙の体験記「車中の出来事」（1923年）、中島敦の小説「巡查の居る風景——1923年の一つのスケッチ」（1929年）、壺井繁治の長詩「十五円五十銭」（1947・1948年）などであった。朝鮮の文学者で震災を直接経験した金東煥「哭廢墟」（1925年）や李箕永「인상 깊은 가을의 몇 가지 [印象深い秋のいくつか]」（1936年）などの作品に関する研究も少数ながら行われ、李箕永と中島敦、中国人作家の郭沫若の比較研究もなされた。これらの文学研究については、2013年に、資料も先行研究も少ないなかで注目すべき成果ではあるが、文学の背景にあるはずの朝鮮人虐殺そのものや時代状況に対する考察が不十分であるとの指摘がなされた（노주은 2013）。

それから10年が経過して、文学研究者自らによって、先行研究のほとんどが特定の作家や個別作品中心の「作家論・作品論」だったことが問題とされ、歴史的背景や時代状況を踏まえた総合的分析が試みられるようになった（김여진 2021・22, 조미경）。このような変化は、先で述べたように、特定のテキストや作家に限定せず、歴史など隣接分野と関連づける日本文学研究が増えたという、全般的な変化とも関連する。

関東大震災朝鮮人虐殺に関する近年の文学研究の特徴をもう少し詳細にみてみよう。

#### (1) 新しい作品の発掘と比較分析

まず、これまであまり取り上げてこなかった日本の小説——徳田秋声「ファイアガン」（1923年）（김여진 2021）、佐藤春夫「魔鳥」（1923年）（김여진 2023）、江馬修「血の九月」（1930年執筆、1947年刊行）（황익구）——、朝鮮文学——鄭宇洪の『震災前後』（1931年）（이행선）、廉想渉「宿泊記」（1928年）と俞鎮午「帰郷」（1930年）（오혜진）——が発掘・分析されたことが挙げられる。朝鮮文学研究では、震災以降、朝鮮人の書いた体験記や記事が検閲によって美談に変わってしまうが、朝鮮人の身体に刻まれた恐怖やトラウマはその美談に亀裂を作ったことを明らかにした研究もなされた（김도경）。

「震災文学」と震災以降の「復興物語」との比較分析も興味深い。朝鮮人虐殺を取り上げた日本の「震災文学」は程度の差はあろうが、朝鮮人に加えられた暴力への怒り、日本人や日本文化の非道徳的醜悪さを露呈しており、流言飛語の不当性と他民族への憎悪について問題提起している。しかし、長田秀雄の「大震回顧」（1924年）や水上瀧太郎の「銀座復興」（1931年）では、流言飛語が既定事実、しかも東京復興への希望にととの「不祥な傷」として扱われており、朝鮮人虐殺の記憶が消去されている（조미경）。ただ、なぜ消去されたのか、虐殺の歴史が復興の陰に隠れてしまったことの意味や影響など、歴史の文脈からの分析が十分とは言い難い。

このような問題は、朝鮮人虐殺を、天譴論や無常論のような日本の伝統的災害観が状況によって



はいつでも理性を失った集団的狂気になり得る事例とみなした, 허석 (2014) にもみられる。この論文では, 地震学者・文人の寺田寅彦の日記から, 朝鮮人虐殺を「率直に認める」部分を引用し, 日本の知識人社会に普及していた反省的気運と評価している。自警団については, 元来, 相互扶助精神に基づいて構成されるが, その適用範囲を自民族に限定し, 異民族には極めて暴力的だったと分析している。日本の伝統的災害観と関連づけた研究方法は文学研究ならではの方法論である。しかし, 朝鮮人虐殺は当時の日本政府でさえ「率直に認め」ざるを得なかったという事実や植民地支配という歴史背景を十分考慮せず, 朝鮮人を「一異民族」とみるなど, 歴史や時代状況にもう少し注意を払う必要がある。

歴史認識の不在ともいえる事例もある。震災当時, 日本の新聞記事や知識人の文章, 官憲の対応, 朝鮮人の文学作品を比較し, それぞれ他者に対する視線の違いを分析した 이미경 (2022) の参考文献には, 姜徳相, 琴秉洞, 山田昭次の文献と並んで, 代表的な朝鮮人虐殺否定論者の工藤美代子の書籍が挙げられている<sup>(24)</sup>。本文中の引用はないものの, 研究の論旨とは別に研究者の歴史認識が問われかねない。

歴史研究者は, 史料不足を嘆きながらも文学作品や文学研究の成果をあまり参考にしない。このような現状を乗り越えるためには, 歴史研究は文学研究の進展によって発掘された作品を, 文学研究は歴史研究によって明らかになった史実を, 互いの研究成果と方法論に学びながら学際交流を続けていかねばならないと考える。

## (2) 現代社会の嫌悪や差別への批判

2020年前後, 現代社会の嫌悪や差別に対する問題意識から出発した研究が行われるようになった。日本だけでなく, セクシュアルマイノリティや「多文化家庭」, 外国人労働者, 難民, 特定の文化圏や宗教に対する差別や嫌悪, コロナパンデミックから現れた新たな嫌悪など, 韓国社会も多くの問題に直面している。これらの差別や嫌悪に警鐘を鳴らし, 歴史の教訓を得ようとする試みといえる。震災時の流言飛語は現在の差別や憎悪の原点で, 現在のヘイトクライムは虐殺の現代バージョンであるとみなす研究が行われている (노윤선, 박성호, 김여진 2023)。

現代社会の問題や在日朝鮮人に対する関心は在日朝鮮人文学研究にもつながった。김계자는, 関東大震災を取り上げた白鉄の詩「九月一日」(1930年)と尹敏哲の詩「震災」(1992年), 阪神淡路大震災時の金時鐘の寄稿文「苦難と人情と在日同胞」(1995年), 盧進容の詩「赤い月」(1995年)と「蘇生紀」(1999年), 東日本大震災を経て刊行した金時鐘の災難詩集『背中の地図』(2018年)を分析した。これらの作品は, 在日朝鮮人が後景になるのではなく, 逆に日本社会を対象化させ, 主体的な意思を表明する存在とみなされる。황익구는, 江馬修「血の九月」と, 同じ頃に発行された金秉稷『関東震災・白色テロルの真相』(朝鮮民主文化団体総連盟, 1947年), 金紅園『朝鮮人狩り』(社会書房, 1948年)を比較し, 責任をめぐる「叙事」の違いを分析した。

韓国における震災関連の歴史研究が日本の研究成果の韓国語翻訳出版から本格化したように, 日本文学研究は128編もの作品が収録されている琴秉洞編『朝鮮人虐殺に関する知識人の反応2』(緑

(24) 『関東大震災「朝鮮人虐殺」の真実』産経新聞出版, 2009年。本文に歴史否定や歪曲に触れる内容はない。

陰書房，1996年）に頼るところが大きかった。近年には，在日朝鮮人の歴史研究者の成果に学びながら，作品の発掘や新しい方法論の導入，研究対象の拡大などを通じて独自の領域を作りつつある<sup>(25)</sup>。

#### 4 現代文化，記憶，歴史否定

本節では関東大震災朝鮮人虐殺をめぐる文化的再現や記憶に関する研究を検討する。

##### (1) ドキュメンタリーとTV番組

まず注目すべきは，在日朝鮮人の呉充功監督のドキュメンタリーである。「隠された爪痕」（1983年）と「払い下げられた朝鮮人」（1986年）は，制作当時には韓国で関心が払われなかったが，2012年，東北亜歴史財団主催で初めて上映されてから毎年市民団体などによる自主上映会が行われるようになった。주해정은，呉充功監督のドキュメンタリー制作は市民主導の歴史究明運動であり，さらに社会的，法律的責任を通じた日本政府の社会的治癒の履行を促す役割をも果たすことになる<sup>(26)</sup>。이규수(李圭洙)は，関東大震災朝鮮人虐殺が90年代以降，歴史修正主義の台頭と日本の排他的風潮によって忘却されようとする現状を批判し，当時「謝罪と自責」を表明した弁護士・布施辰治や呉充功監督の作業，「良心的」日本の市民運動から記憶の正しい継承のための連帯と研究の可能性を模索した。呉充功監督のドキュメンタリーは震災と朝鮮人虐殺の記憶を否定や忘却から守って記憶，継承させる，重要な役割を果たしていると評価されているのである。

一方，韓国では映画<朴烈>の公開以降，TV芸能・教養番組で震災と朝鮮人虐殺を取り上げるようになった。배영미(2022)は，KBS(2019)・MBC(2019)・SBS(2022)で放映された三つのTV芸能・教養番組の内容を分析し，このテーマについて韓国社会が何をどのように記憶すべきかを検討した。

##### (2) 歴史否定に対する批判

忘却への警戒と記憶・再現への関心は，歴史否定に対する批判的考察につながった。2020年，アメリカ・ハーバード大学ロースクールのラムザイヤー教授の書いた，日本軍「慰安婦」問題を否定する論文は，日韓をはじめとする国際社会の批判と非難を呼び起こした。ラムザイヤーは日本の被差別部落（2017年，2018年），関東大震災朝鮮人虐殺（2019年）などをテーマにした，いくつかの論文も発表した。これらの論文は，在日朝鮮人とマイノリティ集団を犯罪者扱いし，彼らに対する差別や暴力，虐殺を日本の正当防衛かのように歪曲するものであった。ラムザイヤーの論文で

(25) 日本文学分野では2017年，日本文学の韓国語訳と解説のついた，2冊の単行本——엄인경・김보경 편역 『시가로 읽는 간토대지진 [詩歌で読む関東大地震]』(역락)，정병호・최가형 편역 『간토대지진과 작가들의 심상풍경 [関東大地震と作家たちの心像風景]』(역락)——が出版された。

(26) 呉充功監督の作品に関しては，韓国の劇作家，金義卿の二つの戯曲（「植民地からきたアナーキスト」1984年，「失われた歴史を求めて」1985年）と比較して同時代性などを分析した백현미の論文と，記憶と再現をキーワードに分析した修士学位論文（신채원 「관동대지진 조선인 학살 사건의 기억과 수용 - 오충공 작품을 중심으로 [関東大震災朝鮮人虐殺事件の記憶と受容——呉充功作品を中心に]」 聖公会大学，2021年）が出されている。

歴史否定とマイノリティに対する嫌悪・侮辱が密接に結びついていることを明らかにしたが, 조경희 (2022) 論文である。

日本の歴史修正主義やラムザイヤー論文に代表される歴史否定は, 韓国にとってもはや他人事ではない。2000年代半ば, 韓国のニューライト陣営は韓国近現代史科目の検定教科書に対して「自虐史観」と批判し, 教科書フォーラムを作って教科書を作るようになった。日本の「新しい歴史教科書を作る会」(1997年)の誕生過程と酷似している。彼らは2015年, 当時の政権が強行しようとした歴史教科書の国定化に結集した。国定化が断念されてから4年, 이영훈 외 『반일종족주의』(미래사, 2019年日本語版: 李栄薫ほか『反日種族主義』文藝春秋, 2019年)が出版され, 物議をかもした。人権・平和といった民主主義の基本的な価値や史実に反して嫌悪に満ちた, 歴史否定の言説はYouTubeなどを通じて無批判に拡散されている<sup>(27)</sup>。

韓国で, 関東大震災朝鮮人虐殺が歴史否定の対象にされたことはない。しかし, 日本軍「慰安婦」や強制動員の歴史を研究し被害補償を求める動きを, 「自虐」的な「反日種族主義」だと貶す韓国の歴史否定の文脈から自由ではないはずである。

## おわりに

以上, 関東大震災朝鮮人虐殺から100年を迎える2023年までの約10年間を中心に, 韓国における関連研究の傾向や特徴を考察した。研究論文, とくに歴史研究の飛躍的な増加が目立つ。歴史研究の特徴として, 朝鮮人の対応に関する多角的分析, 中国人虐殺や植民地主義, ジェノサイド, 在日朝鮮人に対するヘイトスピーチへの着目などが挙げられる。文学研究では, 新しい作品の発掘と比較分析, 現代社会の嫌悪や差別への批判がなされている。また, 在日朝鮮人監督の呉充功監督のドキュメンタリー作品や韓国のTV番組を分析した研究や, ラムザイヤーによる歴史否定を批判する研究も現れた。歴史研究も文学研究も日本の先行研究に学びつつ, ようやく独自の成果を出し始めたといえる。

研究だけでなく市民社会の取り組みも進展してきた。2007年, 市民運動として関東大震災朝鮮人虐殺問題に取り組む「1923韓日在日市民連帯」が組織された。韓国で発足した団体ではあるが, 日本人, 在日朝鮮人との連帯運動を展開するための組織であった。この活動の成果をもとに, 2020年には「記憶と平和のための1923歴史館」と「1923ジェノサイド研究所」が設立された。2023年の今年, 「1923韓日在日市民連帯」をはじめとする韓国の40個あまりの市民団体が集まり, 「関東大震災100周年追悼事業推進委員会」が構成され, 追悼行事が行われた。

出版物も研究書ばかりでなく, 童話『괴물들의 거리 - 관동대지진 조선인 대학살 [怪物たちの街——関東大地震朝鮮人大虐殺]』(2019年)<sup>(28)</sup>と絵本『옛장수 구학영 -1923년 9월 5일, 사이타마에서

(27) 『反日種族主義』に代表される韓国での歴史否定を批判する研究に, 강성현 (康誠賢) 『탈진실의 시대, 역사 부정을 묻는다 - '반일 종족주의' 현상 비판 [脱眞實の時代, 歴史否定を問う——'反日種族主義' 現象批判]』(푸른역사, 2020年), 전강수 『<반일종족주의>의 오만과 거짓 [反日種族主義の傲慢と偽り]』(한겨레출판, 2020年)などが挙げられる。

(28) 박지숙 글·이광익 그림, 풀빛。

학살된 조선인 청년의 이야기 [飴売り具學永——関東大震災で虐殺された一朝鮮人青年の物語] (2021年)<sup>(29)</sup>が刊行された。また、1,100もの証言を取録した西崎雅夫『関東大震災朝鮮人虐殺の記録』(現代書館、2020年)の韓国語翻訳も進められている。

それでも、まだ課題は残る。

震災と虐殺による朝鮮人被害者の規模など全体像が把握されていない。2013年、駐日韓国大使館の移転の際、226名の氏名、本籍、年齢、虐殺された日時や場所、状況などが記されている「日本震災時被殺者名簿」(1952年作成)が発見された。非常に重要な資料ではあるが、虐殺被害者全体を把握するには不十分である。「どのように生きたか、どのように死んだか」が忘れられることがないように、より丹念な資料発掘と整理によって朝鮮人被害者の全体像を示さなければならない<sup>(30)</sup>。

中国人と日本人(社会主義者・沖縄など他地域出身・障がい者)虐殺をも視野に入れた研究が求められる。この課題はすでに提起されている(다나카 마사타카 2015など)。ただ、ここで留意すべきは、植民地主義に起因する朝鮮人差別と、マイノリティ集団に対する国家暴力や階級問題による他の虐殺を安易に同一化せず、共通性と違いをはっきり打ち出すことである。この研究が先行してこそ、より普遍的なジェノサイドと関連づける議論が可能になると考えられる<sup>(31)</sup>。

これまでの研究や市民運動の成果を踏まえ、上記の課題に取り組みながら、関東大震災朝鮮人虐殺に関する史実を日韓をはじめとする東アジアが共有していかねばならない。同時に、その史実をどのように記憶し、継承させるのかを一緒に議論する必要がある。史実と記憶の共有が可能になれば、忘却や歪曲、否定に惑わされない、東アジアの新しい100年、平和な100年が開かれるであろう。

(ペ・よんみ 韓国・独立記念館)

(29) 김중수 글·한지영 그림, 기억의 서가. 翌2022年には日本語版, キム・ジョンス著, ハン・ジョンイラスト『飴売り具學永——関東大震災で虐殺された一朝鮮人青年の物語』(展望社)が刊行された。

(30) 真実・和解のための過去事整理委員会「関東大地震朝鮮人犠牲者名簿に関する実態調査」(2022年, 責任研究員: 河棕文)によると, 大使館で発見された「名簿」と各種文献資料, 日本各地の慰霊碑などに基づき, 被虐殺347名, 行方不明9名, 人身被害51名, 自殺1名など, 408名の朝鮮人犠牲者が確認できるという。ただし, 東京都慰霊堂や司法省の名簿など, さらなる調査と発掘が求められている。

(31) 他民族に対する虐殺やジェノサイド, 植民地支配と国家暴力を論じる際, 関東大震災朝鮮人虐殺と一緒に検討されねばならない事例として, 万宝山事件と朝鮮排華事件(1931年)を記しておきたい。中国・長春地方での開墾地・水路をめぐる朝鮮人移住農民と中国農民との衝突が朝鮮に誇張・歪曲報道され, 朝鮮居住の中国人華僑に対して朝鮮人が暴力をふるって500名以上の死傷者を出した事件である。「階級内部の葛藤の上に民族間の葛藤が積み重なった植民地朝鮮の都市暴動」(정병욱「신설리 패, 중국인 숙소에 불을 지르다-1931년 반중국인 폭동에 대한 재해석」[新設里輩, 中国人宿所に火をつける——1931年反中国人暴動に対する再解釈]『역사비평』[歴史批評] 101, 2012年), 「近代東アジアで発生した移住またはそれをめぐる複雑な葛藤と暴力」(윤해동「'만보산 사건' 과 동아시아 '기억의 터' - 한국인들의 기억을 중심으로」[万宝山事件と東アジア「記憶の場」——韓国人の記憶を中心に]『사이間 SAI』14, 2013年)という性格は震災時朝鮮人・中国人虐殺と類似している。

① 歴史

■ 震災当時

- 장세운 「관동대지진 때 한인 학살에 대한 『독립신문』의 보도와 그 영향 [關東大地震時韓人虐殺に関する『獨立新聞』の報道とその影響] 『史林』 46, 2013 年
- 다나카 마사타카 (田中正敬) 「간토대지진과 지바에서의 조선인 학살의 추이 [關東大地震と千葉における朝鮮人虐殺の推移] 『한국독립운동사연구 [韓國獨立運動史研究] 47, 2014 年
- 성주현 「1923 年 관동대지진과 국내의 구제활동 [1923 年 關東大地震と国内の救済活動] 『한국민족운동사연구 [韓國民族運動史研究]』 81, 2014 年
- 홍선표 「관동대지진 때 한인 학살에 대한 歐美 한인세력의 대응 [關東大地震時韓人虐殺に対する歐米韓人勢力の対応] 『동북아역사논총 [東北亞歷史論叢]』 43, 2014 年
- 김광열 「1923 年 일본 관동대지진 시 학살된 한인과 중국인에 대한 사후조치 [1923 年 日本 關東大地震時虐殺された韓人と中国人に対する事後措置] 『동북아역사논총』 48, 2015 年
- 김인덕 「관동대지진 조선인학살과 일본 내 운동세력의 동향 [關東大地震朝鮮人虐殺と日本内運動勢力の動向] 『동북아역사논총』 49, 2015 年
- 성주현 「식민지 조선에서 관동대지진의 기억과 전승 [植民地朝鮮における 關東大地震の記憶と伝承] 『동북아역사논총』 48, 2015 年
- 김광열 「관동대지진 이후 일본의 제도부흥사업과 한인 노동자 - 건축자재 자갈의 공급을 중심으로 [關東大地震以降, 日本の帝都復興事業と韓人労働者——建築資材の砂利供給を中心に] 『韓日民族問題研究』 31, 2016 年
- 김광열 「21 세기 일본의 ‘헤이트스피치’ 와 1923 年 관동대지진 시 한인 학살범의 논리 고찰 [21 世紀日本の ‘ヘイトスピーチ’ と 1923 年 關東大地震時韓人虐殺犯の論理考察] 『韓日民族問題研究』 33, 2017 年
- 조경희 「관동대지진 전후 제국일본의 조선인 대책과 사회사업 사상 - ‘내선융화’ 사업을 중심으로 [關東大地震前後における 帝國日本の朝鮮人対策と社会事業の思想——‘内鮮融和’事業を中心に] 『大丘史學』 128, 2017 年
- 강효숙 「관동대지진 당시 조선인 학살의 의미 - 민족, 제노사이드 [關東大地震當時における朝鮮人虐殺の意味——民族, ジェノサイド] 『전북사학 [全北史學]』 52, 2018 年
- 강경자 「관동대지진 조선인 학살 전후 ‘불령선인’ 을 둘러싼 언설과 시책 [關東大地震朝鮮人虐殺前後 ‘不逞鮮人’ 을めぐ는言説と施策] 『日本文化學報』 86, 2020 年
- 배영미 「1920 년대 두 번의 조선인학살 - ‘나카즈카와 사건, 기모토 사건’ - 의 실태와 관동대지진 때 학살과의 비교 분석 [1920 年代における二度の朝鮮人虐殺——‘中津川事件’ ‘木本事件’ の実態と關東大地震時虐殺との比較分析] 『한일관계사연구 [韓日關係史研究]』 67, 2020 年
- 김강산 「관동대학살에 대한 제일본조선인의 대응 - 재동경이재조선동포위문반을 중심으로 [關東大虐殺に対する在日本朝鮮人の対応——在東京罹災朝鮮同胞慰問班を中心に] 『한국독립운동사연구』 75, 2021 年
- 배영미 「신문 보도를 통해 본 조선 내 관동대지진 ‘희생자’ 추도 주체의 변화와 그 함의 -1923 年에서 해방까지 [新聞報道を通じてみた朝鮮内關東大地震 ‘犠牲者’ 追悼主体の變化とその意味] 『韓日民族問題研究』 41, 2021 年
- 김강산 「관동대학살에 대해 해외 조선인이 생산한 문건과 그 성격 [關東大虐殺に対して海外朝鮮人が作成した文書とその性格] 『동국사학 [東國史學]』 74, 2022 年
- 김진웅 「관동대지진 이후 일본지역 조선인 유학생계의 변화와 학생운동의 추이 [關東大地震以降, 日本地域朝鮮人留學生界の變化と學生運動の推移] 『史林』 82, 2022 年
- 기다 에미코 (喜多恵美子) 「화가들이 본 지진과 조선인 학살 [画家たちがみた地震と朝鮮人虐殺] 『한국독립운동사연구』 82, 2023 年

■ 戦後 (研究史含む)

- 노주은 「동아시아 근대사의 공백 - 관동대지진 시기 조선인 학살 연구 [東アジア近代史の空白——關東大地震時期朝鮮人虐殺研究] 『역사비평 [歷史批評]』 104, 2013 年
- 우영송 「한국정부 생산 일본진재시피살자명부 [韓國政府生産 日本震災時被殺者名簿] 『韓日民族問題研究』 27, 2014 年
- 강효숙 「1923 年 관동지역 조선인학살 관련 향후 연구에 대한 고찰 - 일변협 (日弁協) 의 보고서를 중심으로 - [1923 年 關東地域における朝鮮人虐殺関連の今後の研究に対する考察——日弁協の報告書を中心に] 『전북사학』 47, 2015 年

다나카 마사타카 「관동대지진 조선인 학살 연구의 과제와 전망 - 일본에서의 연구를 중심으로 [關東大地震朝鮮人虐殺研究の課題と展望——日本における研究を中心に]」 『동북아역사논총』 48, 2015년

김인덕 「1923년 관동대지진과 조선인학살 사건이 재일한인 사회에 주는 현재적 의미 - 민단과 총련의 주요 역사교재와 『민단신문』의 기사를 중심으로 - [1923年関東大地震と朝鮮人虐殺事件が在日韓人社会に与える現在の意味——民団と総連の主な歴史教材と『民団新聞』記事を中心に]」 『韓日民族問題研究』 33, 2017년

다나카 마사타카 「일본 내 관동대지진 때의 학살사건 진상 규명 운동의 현황 [日本における関東大地震時虐殺事件真相究明運動の現況]」 『韓日民族問題研究』 33, 2017년

김도형 「관동대지진 한국인 피살자 명부 자료의 분석 [關東大地震韓國人被殺者名簿資料の分析]」 『北岳史論』 12, 2020년

김강산 「제노사이드의 관점으로 본 관동대학살 [ジェノサイドの観点からみた関東大虐殺]」 『한국독립운동사연구』 81, 2023년

정려정 「관동대지진 중국인 학살에 대한 진상조사와 추모활동 [關東大地震中国人虐殺に対する真相調査と追悼活動]」 『한국독립운동사연구』 82, 2023년

■ 教科書

서중진 「일본 교과서의 관동대지진과 학살사건 기술 내용 분석 [日本教科書の関東大地震と虐殺事件記述内容分析]」 『역사교육 [歴史教育]』 128, 2013년

서중진 「일본 고등학교 검정교과서 '역사총합'의 식민지기 한국 관련 기술 내용 검토 -31운동과 관동대지진을 중심으로 [日本の高等学校検定教科書 '歴史総合'の植民地期韓国関連記述内容検討——三・一運動と関東大地震を中心に]」 『한일관계사연구』 76, 2022년

② 文学

■ 日本文学

이미경 「관동대지진 관련 문학으로 본 조선인관 - 자연주의 작가를 중심으로 - [關東大地震関連文学からみた朝鮮人観——自然主義作家を中心に]」 『일본근대학연구 [日本近代学研究]』 44, 2014년

허석 「근대 일본문학에 나타난 자연재해와 일본인의 災害觀에 대한 연구 [近代日本文学に現れる自然災害と日本人の災害観に対する研究]」 『日本語文学』 62, 2014년

강소영 「요코미즈 리이치와 관동대지진이라는 역사적 기억 - 無常感과 '일본적인 것' [横光利一と関東大地震という歴史的記憶——無常感と'日本的なもの']」 『日本研究』 63, 2015년

김병진 「관동대지진과 오스기사건: 포비아와 쇼비니즘에 대한 왜곡된 표상 [關東大地震と大杉事件——フォビアとショービニズムに対する歪曲された表象]」 『日語日文学研究』 95-2, 2015년

이미경 「관동대지진 관련 문학에 나타난 사건의 표현 양상 - 일본적인 자아와 秋田雨雀의 작품을 중심으로 - [關東大地震関連文学に現れる事件の表現様相——日本の自我と秋田雨雀の作品を中心に]」 『日本語文学』 70, 2015년

허석 「근대 일본문학에 나타난 자연재해와 그 폭력성의 연원에 대한 연구 - 관동대지진과 조선인학살사건을 중심으로 - [近代日本文学に現れる自然災害とその暴力性の淵源に対する研究——関東大地震と朝鮮人虐殺を中心に]」 『日本語文学』 65, 2015년

김지연 「『도쿄재난화신』 속의 일본, 일본인 그리고 조선 [『東京災難画信』の中の日本, 日本人, そして朝鮮人]」 『日本学報』 108, 2016년

심아정 「관동대지진 후 지면(地面)과 지면(紙面)에서 펼쳐지는 감각의 각성 - 곤 와지로와 하기와라 교지로의 예술활동을 중심으로 [關東大地震後, 地面と紙面で繰り広げられる感覚の覚醒——今和次郎と萩原恭次郎の芸術活動をを中心に]」 『뉴래디컬리뷰 [ニューラジカルレビュー]』 70, 2016년

엄인경 「일본의 재난시가에 관한 연구 - 간토대지진에 있어서의 진재영의 유형분석을 중심으로 [日本の災難詩歌に関する研究——関東大震災における震災詠の類型分析を中心に]」 『일본언어문화 [日本言語文化]』 41, 2017년

이미경 「관동대지진 직후 조선인에 대한 표현양상 -9월부터 11월까지 기록을 중심으로 [關東大地震直後における朝鮮人に対する表現様相——9月から11月までの記録を中心に]」 『日本研究』 72, 2017년

노윤선 「일본 지진을 통해 바라본 혐한 (Anti-Korea(n) Sentiment) 와 혐오 발언 (Hate Speech) 에 대한 고찰 - 관동대지진과 동일본대지진을 중심으로 - [日本の地震を通じてみた嫌韓と嫌悪発言に対する考察——関東大地震と東日本大地震を中心に]」 『일본근대학연구』 60, 2018년

이상복 「관동대지진과 조선인에 대한 유언비어 - 허라바야시 다이코의 『숲속』을 중심으로 [關東大地震と朝鮮人に対する流言飛語——平林たい子の『森の中』を中心に]」 『비교일본학 [比較日本学]』 42, 2018년

- 최가형 「전진의 일본문학과 내셔널리즘 - 간토대지진 이후의 에세이 문학을 중심으로 [戰前日本文学とナショナリズム——関東大地震以降のエッセイ文学を中心に]」 『한일군사문화연구 [韓日軍事文化研究]』 26, 2018
- 조미경 「1923년 간토대지진과 조선인학살 사건을 둘러싼 일본문학자의 인식 연구 [1923年関東大地震と朝鮮人虐殺をめぐる日本文学者の認識研究]」 『일본근대학연구』 65, 2019년
- 김여진 (金麗眞) 「간토대지진을 제재로 한 한일 문인의 시가 비교연구 - '죽음' 과 '삶' 을 키워드로 [関東大地震を題材にした韓日文人の詩歌比較研究——‘死’ と ‘生’ をキーワードに]」 『일어일문학 [日語日文学]』 89, 2021년
- 김여진 「간토대지진 시 불령선인 유언비어와 조선인 학살 - 도쿠다 슈세이 『파이어건』의 내용분석을 중심으로 [関東大地震時不逞鮮人流言飛語と朝鮮人虐殺——徳田秋声『ファイアガン』の内容分析を中心に]」 『인문사회 21 [人文社会 21]』 12-4, 2021년
- 김여진 「‘재해’ 라고 하는 전지적 상황과 유언비어 - 조선인 학살 문학 작품을 중심으로 [災害という戦時的な状況と流言飛語——朝鮮人虐殺文学作品を中心に]」 『인문사회 21』 13-4, 2022년
- 박성호 「관동대지진 이후 일본 출판콘텐츠에 나타난 혐한 의식 - 『간토 대지진과 작가들의 심상풍경』을 중심으로 [関東大地震以降, 日本の出版コンテンツに現れた嫌韓認識——『関東大震災と作家たちの心像風景』を中心に]」 『열린정신 인문학연구 [開かれた精神 人文学研究]』 23-1, 2022년
- 황익구 「전후 일본의 관동대지진 조선인학살의 기억과 문학 담론 - 『피의 9월』 과 ‘책임’ 의 서사 [戦後日本の関東大地震朝鮮人虐殺の記憶と文学言説——『血の九月』と‘責任’の叙事]」 『韓日民族問題研究』 42, 2022년
- 김여진 「소수에 대한 혐오와 차별, 그리고 1923년 학살 - 사토 하루오의 『마조』를 중심으로 [マイノリティに対する嫌悪と差別, そして1923年虐殺——佐藤春夫の『魔鳥』を中心に]」 『인문사회 21』 14-1, 2023년

■ 朝鮮文学

- 이행선 「북풍회원이 바라본 관동대진재 - 정우홍의 『震災前後』를 중심으로 [北風会員がみた関東大震災——鄭宇洪の『震災前後』を中心に]」 『北岳史論』 12, 2013년
- 김도경 「관동대지진의 기억과 서사 [関東大地震の記憶と叙事]」 『어문학 [語文学]』 125, 2014년
- 김계자 「일본의 대지진과 재일조선인 - 일본사회를 대상화하는 주체적인 목소리 [日本の大地震と在日朝鮮人——日本社会を対象化する主体的な声]」 『日本研究』 32, 2015년
- 이행선 - 양아람 「마명 정우홍, 사회주의자, 형무소, 관동대진재 - 하야마 요시키, 고바야시 다키지 [馬鳴鄭宇洪, 社会主義者, 刑務所, 関東大震災——葉山嘉樹, 小林多喜二]」 『한국학논집 [韓國學論集]』 69, 2017년
- 오혜진 「관동대지진 이후 조선 지식인들의 일본에서의 삶 - 유진오의 「귀향」과 염상섭의 「숙박기」를 중심으로 [関東大地震以降, 日本における朝鮮知識人の生——兪鎮午の『帰郷』と廉相涉の『宿泊記』を中心に]」 『우리文学研究』 58, 2018년
- 이미경 「관동대지진, 타자를 향한 시선 [関東大地震, 他者に向けた視線]」 『日本語文学』 99, 2022년

③ 現代文化, 記憶, 歴史否定

- 주혜정 「다큐멘터리 영화와 트라우마 치유 - 오충공 감독의 관동대지진 조선인학살 다큐멘터리를 중심으로 [ドキュメンタリー映画とトラウマ治癒——吳充功監督の関東大地震朝鮮人虐殺ドキュメンタリーを中心に]」 『韓日民族問題研究』 35, 2018년
- 백현미 「관동대지진 시기 조선인 학살과 1980년대 한국·일본에서의 문화적 기억 - 오충공의 기록영화와 김익경의 기록극을 중심으로 [関東大地震時朝鮮人虐殺と1980年代韓国・日本における文化的記憶——吳充功監督の記録映画と金義卿の記録劇を中心に]」 『어문론총 [語文論叢]』 89, 2021년
- 이규수 「관동대진재와 한인 학살 - 그 망각과 기억의 소환 [関東大震災と韓人虐殺——その忘却と記憶の召喚]」 『공존의 인간학 [共存の人間学]』 5, 2021년
- 조경희 「마크 램지어의 역사부정과 소수자 혐오 - 관동대지진 조선인 학살, 재일조선인, 부라쿰인 서술 비판 [マーク・ラムザイヤーの歴史否定とマイノリティ嫌悪——関東大地震朝鮮人虐殺, 在日朝鮮人, 部落民叙述批判]」 『여성과 역사 [女性と歴史]』 34, 2021년
- 배영미 「한국 대중문화 속 관동대지진 조선인 학살 관련 서사 분석 - TV 예능 프로그램 <선을 넘는 녀석들> 과 <역사저널 그날> [韓国大衆文化の中における関東大地震朝鮮人虐殺関連叙事分析——TV 芸能番組<ラインを超える人々>と<歴史ジャーナルあの日>]」 『韓日民族問題研究』 43, 2022년